

水田転換畑におけるエダマメ・ブロッコリーの生産技術開発

～年2作体系で転換畑を使いこなす～

副主幹研究員 岡田 功 (園芸研究所)

1. 背景

本県の園芸振興に向け、JAを中心に一億円規模の大型産地を目指したエダマメの生産が取り組まれている。そこで、作付け期間拡大のため、露地での一般的な栽培に加え、県内初となるマルチ栽培による早期出荷の作型を組み入れた栽培技術を確立した。あわせて、土地の有効活用のためエダマメ後作の利用についてブロッコリー栽培を検討した。

2. 研究成果の概要

本研究では、黒大豆品種「たんくろう」を使用したマルチ栽培における生産技術と、エダマメの後作物としてブロッコリーを想定した品種の選定と継続出荷可能な栽培モデルを開発した。

- 1) エダマメの計画出荷のため、播種日から収穫までの日数を明らかにし、7月中旬～8月中旬までの継続出荷可能な栽培モデルを作成した。
- 2) エダマメのマルチ栽培における施肥方法は、基肥として10アール当たり速効性肥料20kg(N:P:K, 13%:13%:13%)と肥効調節型肥料^{*}のLPS40を15kg施用することにより、従来の施用量に比べ、収量は同等で窒素成分を35%削減することが可能であった。
- 3) エダマメのマルチ栽培における栽植密度は、2条植えで一カ所2粒播き、条間45cm、株間25cm～30cmが適正で収量や1莢重が大きかった。
- 4) ブロッコリーの品種として早生では慣行の「ピクセル」に比べ花蕾の盛り上がりが高くアントシアンの発生が少ない「SK3-084」を選定した。中生では作期の早晚から「ハートランド」等を栽培体系に組み込むことにより出荷の継続性が図られる。
- 5) 10月から12月まで安定して出荷できるブロッコリー栽培マニュアルを品種「SK3-084」を主体に作成した。

3. 成果の活用

本成果を活用することにより、エダマメのマルチ栽培における適正な管理方法が明らかとなり、窒素施用量の35%削減や、栽培モデルを活用した市場への安定継続出荷が可能となった。また、エダマメ跡地を有効に活用するため、ブロッコリーの優良品種の選定や栽培モデルの開発等により、一億円産地をめざす転換畑の効率的利用と地場野菜の安定供給が期待される。

^{*}肥効調節型肥料：肥料の溶出パターンを予め調節してある肥料

研究成果の概念図

- 水田を基盤とした農業生産
- 県産野菜の流通量が少ない
- 米の生産数量目標の一層の削減

- 食の安全・安心への関心の高まり
- 地産地消を県民運動として展開

園芸の生産拡大

一億円を目指す
産地づくり

地域リーダーであるJAが主体となり、
大規模産地の形成をめざす

エダマメの産地づくり

作期前進のため県内初のマルチ栽培の導入

- マルチ栽培技術の確立 (窒素成分35%削減)
- ・施肥体系→速効性肥料(N:P:K,13%:13%:13%)
20kg/10a +
肥効調節型肥料LPS40を15kg/10a
 - ・栽植密度→2条植え、2粒播き
条間45cm、株間25~30cm
 - ・栽培モデルによる計画的生産と出荷

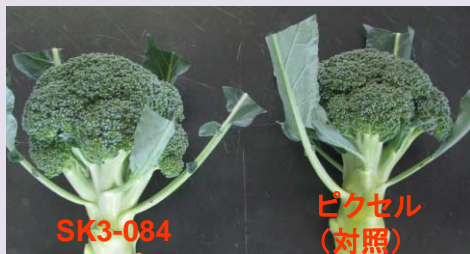
播種日	発芽揃い	開花揃い	収穫始め
4月10日	4月25日	6月9日	7月16日
4月18日	5月1日	6月13日	7月19日
5月7日	5月15日	6月24日	7月29日
* 5月23日	5月30日	7月5日	8月6日
* 6月4日	6月10日	7月14日	8月14日

* この時期はマルチなしでも播種可能

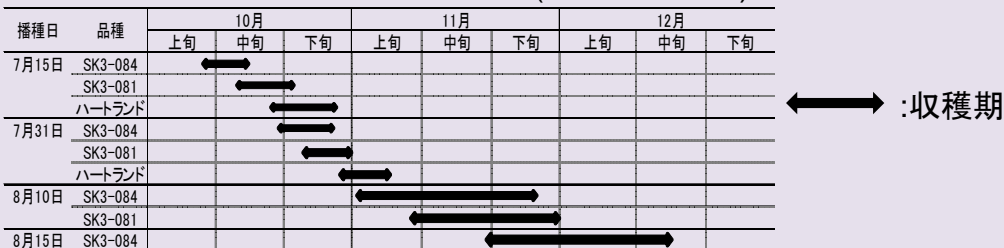
エダマメ後の有効利用

ブロッコリーの品種選定と栽培モデル

- 「SK3-084」を選定
 - ・ピクセル並みの早生性
 - ・花蕾のボリューム
 - ・アントシアンフリー
- 「ハートランド」を選定
 - ・中生では収穫が遅く
 - 早生と組み合わせやすい



SK3-084を主体とした栽培モデル(育苗期間25日)



消費者に県産野菜を
安定的に供給できる
体制の確立

年2作による転換畑の
有効活用

市場から信頼される
産地へ